

田舎はともかくもとして、一般市民の智識が發達して居る爲か、或は博物館の如き施設の歴史の久しい爲か、それとも休日とか餘暇とかに富む社會事情に起因するのか、ともかくも博物館を觀覽する人の多いことは自分の如き日本内地や朝鮮の博物館より見たことのなかつたものには驚くべき程であつた。時によると廣い廊下を押し合ふ様なこともあつた、柄のついた眼鏡を用意して仔細に一々の品物を注意して歩くお婆さんや娘さん達の熱心な態度は此の邊では呉服屋の店頭か活動寫眞の繪看板の前位でより見かけないやうに思ふけれども文展の觀覽客の今年のやうに繁昌するのを考がへ合せるとこれは自分の僻目かも知れない。

旅の思ひ出

旅路の中にこれと思ふ印象を受けたのは、いつ／＼迄も追憶の種となることが多い、旅の日記を繰り返してつきぬ興趣にふけるのは自分ばかりではあるまい。

さても御入京の太公殿下には何くれと考古の御趣味深く在せらるゝと聞いて居る殊には専門家のマグイランスキー氏もついて居らるゝことである、京の都は全體が一つの博物館であるとは、時々此の地で聞く言葉だが、あまりに廣い場所に散漫に陳列して置いたのを今更悔むで見ても仕方ない、此の廣い博物館を主宰して居る人達の力によつて高貴なる賓客の御趣向の一部を満たし得ることもあらば京はいつ／＼迄も御一行の夢路に通ふことであらう。

(日出新聞、大正五年一月二十三日朝・夕刊、旅行日誌の中より)